Title	統合失調症における視覚表象の形成と経過に関する精神病理学的研究
Sub Title	
Author	森本, 陽子(Morimoto, Yoko)
Publisher	慶應医学会
Publication year	2004
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.81, No.2 (2004. 6) ,p.32-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	号外
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20040602-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

統合失調症における視覚表象の形成と経過に関する精神病理学的研究

森 本 陽 子

内容の要旨

「頭の中に映像が浮かぶ」という視覚表象を訴える統合失調症患者を臨床的に調査し、その内容、形式、形成と経過、他の症状との関連を精神病理学的に検討した。対象は35例（男性21例、女性14例）のICD-10の統合失調症診断基準を満たした患者で、平均年齢は35.0±13.6歳、統合失調症と診断された平均年齢は22.0±5.3歳であった。35例においてJaspersの記述現象学的方法論を用いて症状を抽出し、同一症例に見られた複数のエピソードを含め、70の視覚表象エピソードが得られた。視覚表象の初回出現時の年齢は平均21.7±11.3歳で、統合失調症の診断基準を満たす前に視覚表象が出現していたものが35例中16例（45.7%）あった。視覚表象の持続期間は1日で消退したのから内容や形式が変遷しながら33年間ほぼ連日持続しているものまで多様であった。

視覚表象の内容や形式には経過とともに変化がみられ、大きく3つの類型に分類して検討した。第I型は、注意が弛緩しているときにひとりで浮かんできて自分では止められないという軽い束縛を伴うが、主体にとっては意識に侵入される感じが少なく、内容も他愛ないものが中心で苦痛が少ない。自生思考が視覚的な感覚性を帯びた自生体験の可能性が高く、幻覚などの統合失調症症状に発展する初期段階の軽い自我障害と考えられた。第II型は、意識に侵入される感じが強く主体は束縛され、内容も不快なものが多く、主体を動揺させ不安にする。内容が過去の現実に限らず空想的になることもあるが、自我異質性の強い内容になりやすい。主体が内容に反応して何らかの対処を行うこともあり、このような主体の反応も含めてみると、観念と行為を併せ持つ強迫症状に近いと考えられた。第III型は、意識に侵入される自覚が弱いため出現形式は第I型と似ているが、主体が体験の中に取り込まれており、より強く束縛されているといえる。内容は物語的に発展し、願望充足的、さらに荒唐無稽になることもある。体験に抵抗するのではなく現実への関与を放棄して自閉的となる、映像を伴う空想妄想と考えられた。

35例中23例（65.7%）で複数の視覚表象の類型が出現し、第I型、第II型、第III型の順に出現する傾向が指摘でき、逆の順に進展するものについては治療との関連が推測された。統合失調症の診断確定前に視覚表象が出現していた例が45.7%あり、視覚表象、特により早期に出現する傾向がみられた第I型の視覚表象には、統合失調症の早期診断に寄与する可能性があると考えられ、今後多数例における調査・検討が必要と思われた。

視覚表象の類型の変遷には、言語幻聴に代表される統合失調症の幻覚の変遷や、経過とともに自我異質的なものから自我親和的なものへと変化する統合失調症症状の変遷と類似があり、視覚表象は自我の障害を基盤として、その進展に応じて変遷する視覚領域の仮性幻覚であると考えられた。

論文審査の要旨

本論文は、統合失調症における視覚表象について、その内容、形式、形成と経過、他の症状との関連を精神病理学的に検討したものである。Jaspersの記述現象学的方法論を用いて症状を抽出し、視覚表象を有する統合失調症患者35例において70の視覚表象エピソードを得た。視覚表象は自生的な第I型、強迫的な第II型、空想的な第III型に分けることができ、おおむねこの順に経過すると考えられた。逆の順に進展するものについては、治療との関連が推測された。また統合失調症の診断確定前に視覚表象が出現していた例があることから、視覚表象には統合失調症の早期診断に寄与する可能性があると考えられた。視覚表象の病型の変遷には、言語幻聴に代表される統合失調症の幻覚の変遷や、経過とともに自我異質的なものから自我親和的なものへと変化する妄想などの統合失調症症状の変遷と類似があり、視覚表象は自我の障害の進展に応じて変遷する視覚領域の仮性幻覚であると考えられた。

審査では、まず視覚表象の定義について、幻視との違いの確認がなされた。視覚表象が統合失調症の特定の下位分類に出現する傾向について質問され、そのような傾向は見られていないと回答された。著者が検討した3つの病型は、ICD-10の分類に対応したものかについては、対応していないと回答された。第I型は統合失調症の発病前に出現すると考えられるかについては、発病と同時あるいは発病後に出現したものもあり、すべてが発病前に出現するとは言えないと回答された。病型がひとつの型にとどまる例については、観察期間が短いこと、および必ずしも全例進展するとは限らないことが理由として考えうると回答された。視覚表象の浮かび方について、色彩、運動が伴うと答えられたことに関して、視覚処理の多数の経路の関与が考えられるとの指摘を受けた。脳波所見については、異常例はなかったと回答された。次いで外界の实在のものは見えているのかについて、見えてはいるが注意が向かないと臨床では訴えられると回答された。第I型と白日夢など通常の体験との差異については、主体の能動性が希薄になるところが病的であると回答された。視覚表象に聴覚表象が伴っていても視覚表象であると訴えられるのは、体験が視覚表象として訴えられやすい傾向に由来するのではないかと指摘を受けた。また全体として患者の訴えに依存している精神科診断の枠組みは将来変わりうるのではないかと、および表象と幻覚との脳画像検査所見における差異が発見されると興味深いという指摘を受けた。さらに今後の研究の方向として、PETやfunctional MRI等を用いて、脳機能、脳局在性との関連を探求するべきであるとの助言があった。

以上のように、本研究はさらに検討されるべき点を残しているが、統合失調症の視覚表象について詳細に検討し、その精神病理学的意義を明らかにした点で有意義であると評価された。

論文審査担当者 主査 医療政策・管理学 池上 直己

外科学 河瀬 斌 眼科学 小口 芳久

解剖学 仲嶋 一範

研究指導者：鹿島 晴雄（精神神経科学）

学力確認担当者：

審査委員長：河瀬 斌

試問日：平成16年2月14日